

2020 年 10 月 10 日（土）

富山県民会館 401 号室

14:00～15:30

「歴史のなかの立山文化」

富山県[立山博物館] 館長

城岡 朋洋 氏

## 1. 立山の歴史的登場

今日は、立山が歴史的にどのような山として見なされてきたのか、歴史資料を読み解きながらお話したい。そこから浮かび上がるのは、祈りの文化や心の文化とも呼ぶべき素晴らしい文化だと考える。

立山の記述が史料に初めて現れるのは、『万葉集』である。『万葉集』を編纂したとされる大伴家持は、746（天平 18）年に越中国守として赴任した。5 年間の在任中、国守の務めとして越中国内を巡行し、その途中で眺めた立山の歌も詠んでいた。

その一つが「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし」である。当時の立山は「多知夜麻（タチヤマ）」と呼ばれていた。「夏、まだ雪が残っている光景は何度見ても飽きることがない。それは神が住む世界だからだろうか」という歌であり、立山の神々しさへの感慨を歌っていると考えられる。家持は平城京に住んでいた貴族だったが、都には 1000m を越えるような高い山がない。しかし、地方に赴任したことで 2000～3000m 級の山々を見て鄙にある荒々しい自然に驚嘆したのだろう。

古代の人々は、死ぬとその霊は山に行くという考え方を強く持っていた。それはいずれ山の神となっていくのだが、家持はヤマト政権の時代から信仰されていた山の神を立山に発見したことになるのだろう。つまり、立山が地域の信仰の対象となっていて、それに対する畏敬の念を家持は抱いたと考えられる。

## 2. 立山地獄の発見

立山がタテヤマと呼ばれ始めるのは平安時代であり、その頃から立山に対する仏教的な信仰が強くなっていった。

映画にもなった新田次郎の小説『劔岳 点の記』は、前人未踏といわれた劔岳の測量に挑んだ物語だが、主人公の柴崎芳太郎が「銅錫杖頭附鉄剣」（国指定重要文化財）を発見し、自分よりも先に劔岳に登頂した人がいると分かるシーンが描かれている。銅錫杖頭は平安時代初め（9 世紀）のもと考えられ、僧侶が修行のためにこれを持って劔岳に登ったことが分かる貴重な資料である。平安時代になると、山林斗藪（山林に入っの修行、さんりんとうそう）をする僧侶が増えた。ただでさえ命を落とすかもしれない厳しい修行にもかかわらず、登ることが難しいとされていた劔岳でさえ修行の場としていたのである。

そして、劔岳の近くに人を寄せつけず地獄を思い浮かべるような地獄谷の景観が発見された。これにより、奈良時代は神の山とされていた立山は平安時代以降、地獄の山として見られるようになる。こうした意識は、12 世紀の『今昔物語集』にも描かれている。越中国の下級役人の妻が死んで、立山地獄に墮ちたという逸話が載っているのである。当時の都の人々にも、立山が地獄の山であることが広まっていたことが分かる史料である。11 世

紀の『本朝法華驗記』に「日本国の罪人を造りて、多く立山地獄に墮ちて在り」という一文が見られることから、人は亡くなると立山の地獄に墮ちると平安時代の人々に広く認識されていたのだろう。

特に『今昔物語集』で面白いのは、子どもが立山地獄で亡き母に会い、「法華経を 1000 部書写してくれたら地獄の苦しみから逃れられる」と言われ、残された家族の努力によって亡者が地獄の苦しみから逃れることができたという筋立てになっていることである。その後、子どもの夢に母が現れ、「功德によって忉利天（とうりてん）に生まれ変わることができた」と告げている。仏教では、煩悩を持った者は死後、六道（天界、人間界、修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界）のどこかに生まれ変わると考えられていた。天界が最上位、地獄界が最下位であり、その母親は天界まで行くことができたというわけである。

このような筋立ての話は、室町時代にも浸透していたことが明らかとなっている。観世座による夢幻能として演じられた謡曲の一つ「善知鳥（うとう）」に立山のことが描かれており、『今昔物語集』と筋立てがよく似ている。旅僧が立山からの下山途中、亡霊と思われる老人に「供養してほしい」という家族への伝言を頼まれる内容である。これが応仁の乱が始まる直前の 1465（寛正 6）年、室町幕府 8 代将軍足利義政が上皇のいる院を訪れたときに演じられたという記録が残っている。

当時は今よりも気温が低い時期が続き、飢饉が頻繁に起こった。特にその頃には寛正の大飢饉と呼ばれる中世最大の飢饉があり、餓死や疫病のまん延によって都では 2 ヶ月間に 8 万人以上が亡くなったとする記録もある。あちこちで死体が転がり、身近な人を亡くした人も大勢いたことだろう。そのため人々は、身近な人々の霊魂は死後、立山地獄に墮ちたのではないかと考えるようになり、寛正の大飢饉後から、人々の意識に立山地獄が強く意識されて歴史的に浮上し、立山地獄を舞台とする夢幻能が演じられることになったのではないかと考えている。こうして平安から室町時代にかけて、立山は地獄のある霊山として多くの人々に認識されていった。

### 3. 霊山立山の神仏と祈り

立山には、神仏への信仰が見られるさまざまな文化財が残っている。立山山麓にある大岩山日石寺には、国指定重要文化財の「大岩山日石寺磨崖仏」という不動明王像がある。平安時代の作で、この辺りには不動明王信仰があったことがうかがえる。その脇に阿弥陀如来像も彫られているのだが、これは平安時代末期から鎌倉時代にかけての時期に付け加えられた（追刻）と考えられている。つまり、立山山麓では早い段階から不動明王信仰があったが、次第に阿弥陀如来信仰が強くなっていったことが分かる。

立山博物館が所蔵している国指定重要文化財の「銅造帝釈天立像」は、かつて「銅造男神立像」と呼ばれていたが、調査・研究成果によって数年前、名称変更となった。鎌倉時代の作で、右手には筆を持ち、左手には帳面を持っている姿である。帝釈天は、先ほど『今昔物語集』にも出てきた忉利天にある城の主であり、冥界から人間界を見つめて、人が悪いことをしていないかどうか、いいことをしているかという行動を記録し、死後にどの世界に振り分けるかを判断する閻魔王のような役割を担う。このことから、立山では不動明王信仰だけでなく、帝釈天信仰も広まっていったと考えられる。

アメリカのワシントン D.C.にあるフリーア美術館では、アジアの美術品をコレクション

しているのだが、その美術館が所蔵している「地蔵菩薩靈驗記」にも立山地獄の話が出てくる。靈驗記が作られた鎌倉時代の人々も死後、地獄に堕ちて苦しみ続けることを非常に恐れながら生きていた。地獄には、罪の重さや内容によってさまざまなものがあり、受ける苦しみにも大小あるが、家族の追善や生前の行いによって、地獄に落ちても軽い罰の地獄に行ったり、天界に上って救われたりすることがあると考えられていた。この点は、キリスト教の地獄と日本の地獄の差異の一つでもある。そして地蔵菩薩は、地獄に堕ちた者を救ってくれる仏として、古くから庶民たちの信仰を集めていた。

「地蔵菩薩靈驗記」には、地蔵菩薩に関する六つの靈驗譚が描かれている。その第 2 話「地蔵講結縁の人にかわりて苦を受け給う事」という見出しが付いた文章に、立山地獄が出てくる。立山地獄に堕ちた京出身の女性が生前、地蔵菩薩を供養する地蔵講に参加したことがあったため、本来受けるはずの三つの苦しみのうち二つを、地蔵菩薩が代わって受けてくれる（代受苦）ことになった。ただ、残りの一つ、鬼にむち打たれる苦しみからは逃れられなかったため、立山に修行する修験者をお願いして家族に追善供養をするよう伝えてもらうという内容である。

立山の芦峯寺には「木造閻魔王坐像」と呼ばれる像がある。鎌倉時代の作で、高さは 160cm とかなり大きい。閻魔王というと、地獄に堕ちた亡者をどの地獄におとすかを生前の行いによって決める審判官であり、怖いイメージがある。しかし、庶民の間では怖いだけでなく、自分たちを死後救ってくれる存在としても信仰され、さらに閻魔と地蔵菩薩は同体であるという捉え方も強くなっていった。芦峯寺にも、救いの対象として閻魔堂がまつられている。帝釈天、地蔵、観音、閻魔は、地獄に堕ちたとしても救ってくれる存在として庶民の間で信仰の対象となっていたのである。

石川県羽咋市の本念寺には、「立山大権現坐像」という大きな阿弥陀如来像がある。これはかつて芦峯寺にあったものと考えられている。平安末期から阿弥陀如来が一つの信仰対象となっていたが、鎌倉・室町時代になると、立山に阿弥陀如来が現れて人々を救ってくれるという信仰が大きくなっていった。仏教では、煩悩を消して解脱すれば、浄土の世界に往生できると考えられているが、その一つ、極楽浄土の主が阿弥陀如来であり、阿弥陀如来が死後、迎えに来てくれるという信仰が当時強まっていった。この考えは、南北朝期の『神道集』からもうかがえる。

芦峯寺の雄山神社にある開山堂には、「木造慈興上人坐像」がまつられている。鎌倉時代の肖像彫刻の傑作とも評価されている像で、立山開山者の慈興上人の像である。立山に阿弥陀如来が現れて人々の苦しみから救済してくれるということを広めた人物である。

そして、立山博物館には、県指定民俗文化財の「うば尊坐像」が展示されている。暗い所で見ると、とても恐ろしく感じられる像である。地元では「おんばさま」と呼ばれ、古くは大日岳の水源と関わりのある山の神として信仰されてきた。この像の底には「永和元年」（1375 年）の墨書があり、南北朝時代には信仰の対象となっていたことが分かる。神仏習合の中、神であり仏でもあるという捉え方で立山においてまつられていった。

なお、「うば」という漢字は、女偏に田を三つ重ねて書く。女性は子どもを産み、田んぼは実りを生み出すという五穀成就の意味を込めた国字（日本で作られた漢字）と考えられる。この字が初めて登場するのは、1547（天文 16）年の「黄銅製仏餉鉢（ぶっしょうばち）」（県指定文化財）である。実りを豊かにし、命を生み出し、子孫繁栄、さらに武運長久の

力を与えてくれる存在として、戦国武将たちの信仰を集めていった。

このように中世では立山の神仏が祈りの対象として信仰されていたが、神は姿が見えないため像にされにくいのに対し、仏は造形として表されることが多かった。

#### 4. 立山信仰の広がり

「黄銅製仏餉鉢」は、そもそも室町時代にあった 3 体のうば尊像の一つずつに奉納された仏餉鉢だと考えられている。戦国時代の武将寺嶋職恵は、死後に地獄へ落ちないようにおんば様にすがり、これに自らの戒名を刻んだ。戦国武将は力があれば時代を勝ち抜くことができるという力の信奉者かと思いきや、神仏にすがるとも強かったのである。彼らは多くの人々を殺しているため、その罪にさいなまれ、地獄に落ちるのではないかと非常に恐れていたと考えられる。庶民でもそういう考え方が強かったことは説話などからも知られていたが、当時の身分の高い人も地獄に落ちることを恐れ、立山の神仏にすがっていたのである。

中世の公家はまめに日記をつけており、それが良い史料となっている。その一つに戦国時代に書かれた三条西実隆の『実隆公記』と呼ばれる日記がある。1483（文明 15）年 3 月、応仁の乱が終わった後、立山の勸進帳を清書したという記録がある。勸進帳とは、寺社で何かを直したり法要を行う際に寄付金を集めるための趣意書のことで、字がきれいな能書家によく書いてもらっていた。これを作成した翌年には、勸進帳を持った勸進聖（かんじんひじり）と呼ばれる僧侶たちが寄付集めを行っている。このことから応仁の乱後、立山の堂舎や参詣道などが手入れされないままになっていたためか、修繕を行う動きがあったことが分かる。

また、室町期の公家で歌人でもあった冷泉為広の『越後下向日記』では、1491（延徳 3）年 3 月、越後へ向かう途中、越中国で立山を眺望した記述が見られる。小津（魚津）の武将の館から船に乗って黒部に向かっていた途中、富山湾から小津の東に立山（「タテ山」）が見えたと書いている。当時は雨後の晴天であり、為広は大伴家持がかつて見たであろう雄大な立山連峰の絶景を、富山湾から眺めて感動したと推察される。

その他にも、杉坊（すぎのぼう）という僧侶や堯恵（ぎょうえ）という二条派の歌人、道興（どうこう）という聖護院の門跡などが立山を参詣し、万里集九（ばんりしゅうく）という臨濟宗の僧侶が立山を眺めたという記録も残っている。このように地獄のある山、そして家持が歌を詠んだ場所として有名な立山は、中世には名所化も進んでいった。

もちろん信仰の対象としても記録が残っている。応仁の乱以降の古文書を見ると、立山信仰を担う芦峯寺や岩峯寺に対して戦国武将が年貢を免除したり、米や土地を寄進したりする書状をたくさん出している。前田利家も中宮寺（現在の芦峯寺）に対して 100 俵の米を寄進するという文書を、立山寺（現在の岩峯寺）に対して 100 俵の米を進上するという文書を出しており、芦峯寺と岩峯寺を同等に大事にしていたことが分かる。佐々成政も同様の文書を出している。このように戦国武将は、立山の神仏に対して敬信の念を抱き、信仰の里として保護を加えていた。

さらに江戸時代になると、立山曼荼羅が作られるようになった。立山曼荼羅とは、芦峯寺や岩峯寺の衆徒が農閑期に諸国の檀那場や加賀藩領内で布教する際に持参した布教活動用の絵である。また、立山曼荼羅を見ることによって、立山に実際に行くことができない

人も、心を清め、立山に登ったのと同じ効果をもたらされるといわれ、信仰の対象にもなっていた。この布教活動によって立山信仰は上層身分から庶民層まで身分的な広がりをもたないながら全国的に広まった。

立山曼荼羅の一つである国指定重要有形民俗文化財「立山曼荼羅吉祥坊本」には、右上に「静寛院宮御寄附」という張り紙がされている。静寛院宮は、徳川 14 代将軍家茂の正室・和宮のことで、彼女が寄付という形でこの立山曼荼羅の作成に関わっていたことが知られる。このことから、立山曼荼羅は江戸城内の高貴な女性たち、大奥の女性たちの信仰を集めていたことがうかがわれる。

また、立山信仰に関わる山麓での生活用具は、「立山信仰用具」として国の重要有形民俗文化財に指定されており、今年 160 点が追加指定された。わが国の代表的な霊山である立山の山岳信仰の実態を理解する上できわめて重要であると評価されたものである。

立山曼荼羅には、布橋灌頂会（ぬのばしかんじょうえ）が描かれている。これは江戸時代後期、立山禅定登拝が許されなかった女人たちの救済のために行われていた儀式である。閻魔堂の中に女性が入り、罪を懺悔した後、白い布が敷かれている布橋を僧侶に率いられてわたり、おんば様がいるうば堂で生まれ清まりの儀式にのぞむ。閻魔堂は「この世」、うば堂は「あの世」、布橋は三途の川を渡る橋である。つまり、生きながらにして、いったん死んだ者として仏教的な法要にのぞみ、今までの罪を滅ぼす儀式なのである。それによって、血脈という極楽往生の証明書ともいえるべきお札などをもらい、この世に戻ってくることで、地獄に墮ちる不安から解放されたのである。布橋灌頂会は 1996（平成 8）年からイベントとして再現されており、現在は 3 年に 1 回行われている。本来は今年秋の彼岸の中日に行われる予定だったが、コロナ禍の影響で中止になった。

布橋の向こうには立山本峰が見える。そこが阿弥陀如来が現れる場所といわれている。橋を渡り切ると、あの世をイメージさせるように墓が見える。その墓のところに「西御丸」と「老女 八重嶋」という文字が刻まれた石仏がある。八重嶋は 13 代将軍のときの大奥のトップの女性で、死後に地獄へ墮ちないように地蔵菩薩の像を立山に奉納したのである。当時、女性の信仰をどれだけ集めていたか、このことから想像できるだろう。

## 5. 立山信仰は「生の文化」

日本では自然災害が毎年のように発生し、多くの方が亡くなっている。今年に入ってから、新型コロナウイルス感染拡大で身近な人を亡くした方もいるだろう。死と向き合う現実が身近に、しかも日常的にあることを実感させられる。

かつての日本人は、医療が十分ではない中、自然災害、疫病のまん延、戦乱などによって今以上に死と隣合わせで生きていると考え、自らの死や死者に対する意識は強かったと思われる。特に死後、地獄で苦しみ続けることへの恐れを強く抱いていたようで、自分だけでなく亡くなった家族や先祖を苦しみから救いたいと考え、作善に努め、家族や先祖とのつながりを大事にしようとした。

立山の神仏はそうした人々を救ってくれるものとして信仰され、そこから死者を供養する文化が生み出された。そして死の苦しみや不安を乗り越え、現実をたくましく生きる勇気や癒やしを与えてきたと考えられる。そう考えると、立山の文化は死の文化ではなく、再生の文化、生きる文化といった方がいいと思う。

立山の祈りの文化が、歴史的に多くの人々の心を捉えてきたことは、現代においても祈りの風景や文化財を通して知ることができる。しかし、富山県民でも立山の祈りの文化、心の文化をご存じない方が多いのではないだろうか。本日の講演を機に、立山連峰を眺めたときにこうした文化があったことに思いを巡らせていただければ幸いである。